

A close-up photograph of a person's face, focusing on the eye and forehead. The person has dark hair and is looking slightly to the right. The lighting is warm and soft. The text is overlaid on the upper part of the image.

『世界の終りとハードボイルド  
ワンダーランド』  
からの始まり

弥生

高一のときいじめにあった。クラスで一番、華やかな子たちのグループから「はずされた」という、まあ、よくある話だ。でも当時は死ぬほど深刻だったので、よくある話だが書かせてほしい。

あとから知ったのだけれど、いじめの言いだしっぺは、私と小・中学校が一緒に、高校でも同じクラスになった唯一の女の子。最初はとても優しくて手書きのバスの時刻表なんてくれたりした。

でも、クラスで仲良しグループが固まってくると、その子は私の存在が疎ましくなってきたらしい。6人で毎日一緒にお弁当を食べていたので、その日も輪に入ろうとすると、私だけに意味のわからない目配せが始まり、さあっと波が引くように、友人たちは次々と教室を出て行った。私はわけがわからず、廊下まで追いかけて話しかけると返事はなく、彼女たちは目をそらし、くすくす笑いとともに逃げて行った。昼休みにぼつんとひとり取り残されたときの、あの心臓がぎゅっとなる感じ。今でも私の呼吸を浅くする。

つらい毎日が始まった。クラスでも目立つ存在の=権力のあるグループから追われた私には、誰も話しかけない。「あの子と仲良くすれば次はアナタだから」という空気が、こう、教室中に充満しているのだ。お弁当も移動教室もひとり、体育の二人組の体操は先生と。悲しくて毎日遅刻するようになった。朝、5分早く学校につけば、5分間の耐え難い孤独が待っている。事故で死ねたらと常に考え、死ぬつもりだから将来は見えず勉強も手につかない。当然成績は落ちた。

そんな孤独を救ってくれたのは…いや救ってまではくれなかったのだけど、形ばかりでも教室につなぎとめてくれていたのは、本だった。私は手当たり次第、本を読んだ。なんでもよかった。休み時間に一人で机にいても不自然じゃないツールがあればよかった。

教室でひとり本を読むことにも慣れた頃、やっと学年が変わった。二年のクラスには、グループの子は一人もいなかった。これもあとから知ったのだけど、見兼ねた担任が配慮してくれたのだった。

新しいクラス。まわりを見回しても知らない子ばかり。後ろの席の眼鏡の女の子が、ぶ厚い本を持っていた。「何の本？」とおずおずとたずねると、彼女はにっこりと答えた。「『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』。村上春樹だよ。」

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を借りて読むともう完全にノックアウトされてしまった。夢中になる、というより「のめり込みかたが尋常じゃない」。

「計算士」というわけのわからない職業の男が、わけのわからない陰謀に巻き込まれて、わけのわからない結末にたどりつく話と、「夢読み」というわけのわからない男が、壁に囲まれたわけのわからない世界で、わけのわからない結末にたどりつく話が交互に現れる構成。

わけがわからないのに細部が克明に描かれているせいで、本の世界に入ってしまうえばそれは完全に本物になった。私は現実のこの忌まわしい世界を離れ、本の中に入り込んで、主人公と一緒に考え、悩み、あるときは勇気を振り絞り、あるときは絶望した。

本を閉じて現実に戻ってくると、少し何かが修復されていることに気づいた。私と現実世界とのつながり方の、大きく損なわれていた部分の、何か。

私は、薬が手離せなくなるように村上春樹に魅了され『風の歌を聴け』から『ノルウェイの森』まで、全部読んだ。本の世界に没頭し、本をぱたんと閉じてこの世界に戻ってくるたびに、私

は少しずつ癒された。幸せな体験だった。この素晴らしい作家と同時代に生き「次はどんな話を書くのだろう」と心躍る素敵な人生の始まりだった。

現実世界の高校二年の私は、後ろの席の彼女とよく話すようになった。二人で本の話をするのは、心から楽しかった。あのグループでは無理をして、化粧品だの美容院だの話をしていたけれど、本当は全然興味がなかったのだ。

彼女が早く登校しているのに気付いた私は、たくさん話がしたくて早く登校するようになった。少しずつ成績は元に戻り、本を片っ端から読んだせいか国語だけは飛びぬけていた。

あれから二十年、彼女とは、ずうっと友達である。別の大学だが同じ日本文学科にすすみ、一緒に旅行に行っては夜更けまで話し込んだ。結婚した今も、家族ぐるみでお互いの家を行き来し本の貸し借りをする。

二人とも仕事に家事に育児に忙しく、高校生るとき毎日夢中で語り合った濃密な時間は二度と戻っては来ないけれど、年に数回でも彼女と、『1Q84』の青豆は魅力的かとか、映画『ノルウェイの森』のマツケンがイメージどおりだとか、そんな話をするのが何にも代えがたい幸福なのである。